

【開催日時】 令和3年3月23日（火） 午後13時30分～午後15時30分

【開催場所】 能勢町役場2階 議場

【出席委員】 委員18名中14名出席の下、開催した。※順不同
神吉紀世子、猪井博登、神出計、尾下忠、中西信介、榎原友樹、東亮一、三浦嚶子、中谷博、久慈真里、八木修、田中利明、大城桜子、東良勝

【欠席】
上西雅之、野津俊明、三浦勝志、中井正明

【事務局】 中島総務部長、百々総務課長、矢立政策推進係長、株式会社建設技術研究所（業務支援）

【協議事項】

- (1) 前回意見の振り返り
- (2) 基本構想（素案）について
- (3) 今後の調査テーマについて
- (4) その他

・開会

・会長あいさつ

会 長) 本日は、年度内最後の審議会である。3月末でいったんまとめる基本構想（素案）の確認を行う。なお、今後、内容の修正は可能である。
また、4月から皆で手分けをして調査し、オリジナルの情報をつかんでいくこととしているが、後半はその件についてアイデアをいただき、進め方についても考えていただけたらありがたい。
ぜひいろいろな意見をいただければと思う。よろしく願います。

(1) 前回意見の振り返り
事務局) 資料1は前回の振り返りであり、参考資料としてご活用いただきたい。

(2) 基本構想（素案）について

【資料説明 略】

会 長) 何回か見ている文章だが、少しアップデートしている。年度内の成果品として、今日の原

稿で気になるところ、抜けているところなど言っていただきたい。意見を出し合うことが大事だと思う。忌憚のないご意見をお願いしたい。

私自身は、「都市」と書くことについて、解釈をおもしろくするのがよいと思っている。大阪梅田のようなビルがたくさんあるところだけが都市ではなく、農村もあり、自然環境もあり、高密度ではないが、いろいろなタイプの仕事をしている人やいろいろな環境の守り方をしている人、人の縁を複雑に多様に持っている人が、のびのびした密度で住んでいるのが、本当の都市であるべき。そういうことを逆提案していく意味で、あえて「都市」と書くのはよいと思っている。梅田のようになろうとしているのではなくて、これくらいの姿が本来の「都市」なんだと言っていく。そういうメッセージ性があるとよいと思った。いかがか。

委員) 私も「里山未来都市」の「都市」にこだわる。町内の99%が市街化調整区域であり、市街化を停止、否定している。それで「都市」という言葉をあえて使うことに非常に違和感がある。この言葉を使うのであれば、以前から再三申しているように、調整区域をどうするかについて、議論しなければならない。99%も調整区域にしておいて、何が「都市」なのかと笑われてしまう。しかし、「里山未来都市」の「都市」に変わる適当な言葉がなかなか思い当たらない。

会長) ここは異論のあるところだと思う。いまのところは、こうしておいて、考え続けたい。

委員) 市街化調整区域の問題を並行して進め、この会議の中で、メッセージを出すべき。このために人口が20年で5千人も減っているのであるから、これに蓋をして、審議会で10年先を議論しても、何をしていたのかということになる。並行して考えていただきたい。

会長) 今日の午前中に、東京で建築学会の年度末のまとめ委員会があり、都市計画の制度そのものが古いのではないかという話があった。

能勢の人が、市街化調整区域をやめたいと言われるのは、いろいろ困っているからであり、都市開発をしたいからではない。それなのに都市計画の中核にいる人は、全部宅地化してニュータウンにするようなイメージで受け止める。前から言われているようにバランスの問題である。

委員) 市街化区域にして、開発に重きをおけば、不動産屋と土建屋だけが儲かるような言い方をされる。そういう気質が能勢町には昔からある。しかし、不動産屋が儲けて、土建屋が儲けて、というふうに順番に影響する。「風が吹けば桶屋が儲かる」である。それがわからない人が多いから、蓋をして通過している。本来は、10年前の審議会でこの問題を整理しておかなければいけなかった。

会長) 少し擁護すると、審議会で蓋をしたわけではなく、大阪府と都市計画法による「蓋」が多かった。

委員) 都市計画法43条はよく読んでいる。もちろん大阪府に決定権があるのだが、能勢町の態度をしっかりと示さないと、大阪府も相手にしない。最終的には町議会で決定し、町長が決断し、それから府との交渉となる。そのために審議会で審議したことを明確に打ち出してもらいたい。大阪府は調整区域でおいておきたくて、いろいろ言われると困るのだと思う。

会長) この件に関しては、バブルの時期に乱開発などから守るためには必要だったのであり、英断だったと思う。

将来の地域の使い方を具体化することが重要である。既存の制度が存在する中、制度論で

はなく、具体論。住みよい環境をどう作るのかを具体的に書いていくことが必要であり、今回は、そこを書くチャンスかもしれない。農園を残すことを含めてしっかり書いていかないといけない。

「里山未来都市」という使い方の是非については、一応書いているが、変えるかもしれない、という扱いにしておいたらどうか。

私は「都市」に対して能勢の姿をモデルにするようにと言いに行くような感じで思っているが、いろいろな解釈ができる。異論が出る部分でもあり、これをきっかけに議論するのもよいかもしれない。

委員) 重要な要素をあげていただいていると思うが、ぱっと読んだときに、やや羅列感があると思った。将来像の項目に、こういう将来を目指すということだけを書くのか、現状、課題、将来を書くのか、それを整理する必要があると思う。いまの構成は、現状があり、課題があり、将来像となっているが、将来像のところはあまり書かれていない。

たとえばクリ林など生態系が優れている、地域包括システムで人の健康の取り組みができているという現状があるのに対し、人口が減少し、地球環境問題にも対応しなければならない、このまま放っておいたら維持できない、だから将来こうするのだというロジックで書くのか、あるいは、目指している将来像は具体的にこうだ、と書くのか、まずはそこをはっきりしていただきたい。

サブタイトルにある「人・地域・健康を守る」の意味について、先ほど、事務局が説明したようなことを書いたらよいと思う。

接続詞と組み合わせの問題だと思う。タイトルと中身とロジックを整理すれば、魅力がぐっと高まると思う。本質的なことでなくて申し訳ない。

会長) 本質的なことである。いかにつなげるかが構想の一番大事なところである。

委員) 皆さんが揉んでここで共有した未来像、それはよい未来だから目指せる、ということを書かないといけないと思う。問題意識は書けるが、将来の絵を描くのは難しい。

会長) 確かに将来像そのものを具体的に説明しているところはなく、少し宙ぶらりんである。土地利用の許認可制度にも、暮らしや文化にも、あらゆることにつながる将来像でなければならないが、それが書かれていない感じがする。

委員) 何を目指しているのかを書くべき。先ほどの説明で、精神的な健康、地域の経済が回ること、自分でできることをやり自立しているなど、よいことを言われていたのでそういうキーワードをしっかり書いて、こういう社会を目指そう、でも課題はある、という整理なのかと思う。ここに現状も課題も全部書くのかというのはそういう意味で申し上げた次第である。

会長) 書きぶりや最終的にどういう冊子体にするのかという問題もある。頭が整理された気がする。

委員) 将来像として、具体的なものを示さないといけない。3年前、能勢の栗を世界農業遺産に申請している。各家庭が栗を5本、10本植えれば、栗は成長が早いので10年もすれば、根本の直系15センチくらいには成長して相当採れるようになる。栗は、亀岡や川西ではできず、能勢の栗がおいしいと言われる。それは気候風土によるものである。人気商品で列をなして買いに来てくれる。能勢町の栗を世界農業遺産に、という得意技を前面に出して将来像とすれば、産業を興すことになるし、だれにでもわかりやすい。産業の面ではそれ

を前面に出し、ほかにもいろいろ考えなければいけない。私はそう思う。

会長) いろいろなことを含めての全体的な目標像であり、アイデアをどう全体像にしていくかということがある。栗は代表格で、これは強い。

委員) 得意技を磨かなければいけない。それを将来像の中心に位置付けてもらいたい。そうすれば皆にわかりやすい。10年先のことを考えるなら、10年前に植えた私のところのクリ林を皆さんで見に来られたらよい。

会長) 書き足りないところがわかってきた感じである。ある種の具体性、現状の反省や評価と地域全体をどうとらえるかの間ロジックが重要ということ。ただ考え方のつながりは難しいので、まだ確定でなく、これからアイデアが出てくる可能性をみておかなければいけない。

委員) 一番大事なところが定まっていない気がする。自然をずっと守っていくまちにするのか、ある程度残すにしても、もっと開発してたくさん人と呼ぶのか、静岡のトヨタ未来都市のような都市を作ろうとしているのか、根幹が定まっていないので、少しぶれるのではないか。

私は、自然は、基本的には守っていかないといけない気がする。CO₂を減らす役割があるまち。豊かな暮らしができて、人とのつながりがあり、ソーシャルキャピタルが高く、教育したり、子どもを育てたりする人が集まってくるまち。そういうまちを目指すイメージである。市街化調整区域の問題もあり、ある程度、ひらく部分もあるだろうが、自然をしっかり守り、SDGsで、環境を大事にするまちが望ましいと思う。その中で栗を今後も絶やさず作っていくことも当然大事になる。開発されるとそれができなくなる可能性もある。自然は後から作ることはできないので壊さない、かつ、人が生活するところは充実している、そういうメッセージがA4、1枚で伝わるとよい。そもそも、そういう考えにしていくのかどうか、町としてどうしていくのかをまず決めていく必要があると思う。

会長) この話は、先ほどの都市計画の件で大阪府がどう思っているかということと似ているのだが、言葉の印象と他人が使っている意味は一緒ではない。能勢の方は、全部を都市にしてしまえとはだれも思っていない。現に、しんどくはなっているが、ものすごく土地の管理レベルが高い。里山の手入れについても、境界不明のところは全国的に多いなかで、他の地域と比べると高水準である。水準の高いところにいるからこそ、制度論を鬱陶しく感じるところがあるのだと思う。

私たちだけで決められる問題ではない。都市側に振るのか、今の環境を大事に守るのか、守るにしても、都市的な守り方なのか、もっと人を少なくするのかなど、皆さんが共通に納得するところが、何かから出てきたらよい。

委員) より都市にするのか、自然を守るのかという基本が抜けていると言われるが、いまある自然を開発する業者はおらず、それは基本的にできない。市街化調整区域を指定し、解除した市町村は全国にない。私が言っているのは、水道も道路も通っている既存の住宅地に、だれでも、具体的には不動産業者が買って、家を建てられるようにしようということである。そうすれば、自然は壊れず、空き地がなくなって、子どもの声も聞こえるようになり、かえって環境がよくなる。ここに地下鉄が来ない限りは、開発はできないので心配することはない。

会長) 住宅開発だけでなく、えげつない開発を持ってくる業者が世の中にはいるので、気を付けたほうがよい。

- 委員) 基本構想の大きな絵については、住民と最低限共有できるベースが必要である。それが農村社会のイメージだけで描けるのか。1万人弱の人たちの現実をみると、農家であっても農業をやっていない人も多々いる。そういった状況のなかで、住民が残したいと思うキーワードを「未来都市」とは違う文言で表現できれば、共有できるのかと思う。難しい言葉を使い、横文字が多いと高齢者には共有しにくくなる。どこでも書いているようなきれいな文言でなく、できれば得意技の泥臭い言葉で表現できたらよいと思う。
- 今回の構想を読んで、住民と共有することと外の人へのアピールは、一緒くたにせず、分けないとわかりにくいと思った。
- 会長) オールマイティに世界中の人に通じるようにするのは難しい。住んでいる人の中でわかる言葉にして、地元にはない人に届く言葉は、言い換え、説明し直すということで、キャッチフレーズのあり方を構造化する。地元の人たちがまずうんうんと思い、言い換えると実はこういうことです、というふうなキャッチフレーズの使い方があってもよいのかもしれない。構想の作り方の話であり、なるほどと思った。
- 今日の意見を反映させながら、3月末の案とし、来年度に送ることとする。

(3) 今後の調査テーマについて

- 会長) 神出委員から、前回ご紹介いただいた福祉・健康についてレクチャーをお願いします。
- 委員) 私どもは、能勢町で、8年ほど前から主に介護保険事業運営に係わり、最近は健康長寿事業を大学の研究も受け入れもらう形で進めている。能勢町にはよい点がたくさんあるので、それを知っていただくとともに、皆さんが介護保険制度に馴染みがないようなので、制度や事例など総論的なことも含めてお話する。
- (スライド1) 高齢者率25%以上が超高齢社会と言われるなか、日本は65歳以上の高齢者が29%の超高齢社会であり、世界一長生きの国である。今後、特に75歳以上の後期高齢者が増え、元気な前期高齢者はほとんど増えないと言われている。後期高齢者の中でも、85歳、90歳といった超後期高齢者が増えていく。そういう人たちは必ず身体の機能や認知機能が落ちてくるが、そういう人が全国のまちにたくさんいるようになる。そこで、若い人や元気な高齢者がそういった人たちを支え共生する社会としていかなければならない。能勢町はすでに高齢化率が40%を超え、日本の30~40年後を先取りしている。ある意味未来都市である。そういう中でこれからの10年、どういうまちを作るかというイメージを持たなければならない。
- 日本人の長生きの背景として、社会保障制度が充実していることが大きいと言われており、医療保険、介護保険といったセーフティネットが評価されている。しかし、その財源は生産年齢人口の人が作り、65歳以上では、使う人が増えてくる。医療保険、介護保険にかかるお金の伸びをできるだけ減らしていくためには、ひとつは医療・介護システムの効率化。また、住民一人ひとりが医療や介護を受けなくてもよいように、健康長寿な人を増やしていくことが大事である。2025年には団塊の世代が全員後期高齢者となり、病気を持つ人、介護を受ける人が多くなる。その時の日本の高齢化率は30%を超え、1人の高齢者を2人の生産年齢人口で支える状況になる。私が生まれた1965年は高齢化率が10%だったので、9人の若者が1人の高齢者を支えていた。この時代は高齢者の医療費が無料であった。2050年になると高齢化率が40%になり、1人の若者が1人の高齢者を支えることになる。

これまでは病院完結型で、病院で亡くなるまでみる状態だったが、これからは地域完結型となり、手術や抗がん剤が必要など病気の時だけ病院に入り、それ以外は地域で通院しながら生きていくことになる。それが地域包括ケアシステムにつながってくる。それを目指して、どのまちも地域完結型の医療介護システムを作ることになっている。

(スライド 2) いま日本の健康・医療の最上位にある考えは健康日本 21 (第 2 次) の考え方である。すべての国民がともに支えあい、健やかで心豊かに生活できる活力ある社会の実現のために、健康寿命を延ばし、観光格差を縮小していく。そのためには、生活習慣病の発症予防、重症化予防が必要であり、個人個人で生活習慣の改善をして高血圧や糖尿病を予防していく。さらに社会環境の改善が必要となる。個人が努力しても地域全体の機運がないと実現できないので、社会環境を整備して個人が取り組みやすいようにして健康寿命を延ばしていく。

こういう考え方が提唱されているが、すべての国民、住民がわかっているわけではない。個人個人が健康寿命を延ばすことが大事で、そうすれば医療保険や介護保険を使わなくて済む。そうであれば財源が何とか保てるかもしれない。もちろん、85 歳、90 歳、100 歳近くになれば病気や介護が必要になるので、そういう人のために使う、ということである。

(スライド 3) 日本は、平均寿命と同様、自立して生きていられる健康寿命も世界一長いと言われている。平均寿命と健康寿命の間には男性で 9 年、女性で、約 12 年のギャップがある。これは、入院したり、施設に入ったりして、他人の手を借りて生きていく期間である。それを極力短くし、健康寿命を平均寿命に近づける。最後はピンピンコロリで亡くなる人ばかりになれば、医療保険・介護保険が保てるだろう。だから、健康寿命を延ばそうということである。

健康寿命は自立している期間だが、日本の健康寿命の定義については、意外と知られていない。客観的な指標としては、要介護度 2 以上になって、あなたは元気ですか、という質問に元気だと答えれば、健康ということになる。

(スライド 4) 介護を受ける原因は何かというと、一番多いのは認知症、少し前までは脳卒中だった。脳卒中、がん、心疾患などの病気で介護が必要になる方が 1/3 くらい。もっと多いのは、認知症、高齢による衰弱、関節疾患、骨折転倒など加齢とともに生じる身体の変化であり、原因の半分以上を占める。このような老年症候群は避けることはできないが、取り組みをしていくことで先送りでき、元気な方は、90 歳、95 歳になっても自立して暮らすことができる。メタボ対策等の疾病予防、老年症候群を防止する介護予防の両輪をしっかりと行うことで、健康を守っていく取り組みを行っている。

健康日本 21 (第 2 次) の「高齢者の健康」の最初の部分に「健康寿命の延伸」とあるが、そのためには要介護状態の先送りをする。それには認知症、ロコモティブシンドローム、うつ、閉じこもり、低栄養などの老年症候群の予防が必要。そのためには栄養、運動、社会参加・社会の絆を保つことが重要であり、そういった環境を作っていく必要がある。以前は疾病予防をやってきたが、現状では介護予防が重要になっている。

(スライド 5) 健康長寿に関連する個人の要因として、栄養、運動、社会参加がある。社会参加で、先ほどの議論に出たソーシャルキャピタルが高まる。ネットワークを作り、イベント等に積極的に参加している人は健康長寿であることが、科学的にもわかっているが、それを進めるのが地域社会である。能勢町が個々人の社会参加を進め、病気になったとき

は医療を受けられるようにする。このような形が地域包括システムの基本的なところであり、能勢はそれができている町ではないかと思う。

地域包括ケアシステムの具体的イメージは次のとおり。高齢者の住んでいる町がある。病気になれば医療を受ける。病気が治れば地域に戻り、かかりつけ医に行くか、医者や看護師による在宅医療を受ける。介護が必要になれば介護を受ける。普段からできるだけ医療・介護を受けなくてよいように、介護予防の場に通い、様々な取り組みで身体や心を鍛える。地域包括支援センターが潤滑油になって回していく。これまでは医療と介護の間に壁があったが、その連携をとると風通しがよくなる。医療、介護、介護予防、住まい、生活支援が一体的に提供されるシステムを構築し、地域で人生の最後まで生活していけるまちづくりを行う。最後は自宅で在宅看取りを行う。

(スライド 6) 能勢町で行われている介護予防の取り組みを紹介する。そのためにはフレイルの概念を知る必要がある。健康と要介護の間にフレイルという状態がある。虚弱、身体が弱ってきた状態である。この状態であれば、いろいろな取り組みで健康に戻せる、少なくともここから進まず健康寿命の範囲に保てる可能性がある。

(スライド 7) 高知市で開発され、全国に広がった、いきいき百歳体操というおもりを手足につけて行う簡単な体操があり、能勢町でも取り組んでいる。事務局の矢立さんが能勢町の百歳体操のビデオのモデルになっている。これをやることによって筋力など身体の機能が向上する。さらに運動すると気持ちがよく、ストレス解消になる。皆さんで集まるので、対話があり、情報交換をするので、社会参加になり、ソーシャルキャピタルが高まる。これを各地区でやることによって地域づくりの核となる。それが町内に 44 ヲ所にできている。

(スライド 8) 能勢町から、効果の分析依頼があり、私たちが関わるようになった。年 1 回交流大会を行い、成果が出ていることを報告している。それなら参加しようということで参加者がどんどん増えてきた。

(スライド 9) 能勢町の高齢者は 3,500 人であるが、延べ 1,000 人以上がいきいき百歳体操に参加している。ここまで参加率の高い介護予防の取り組みは他ではみたことがない。女性が 3/4、男性が 1/4、平均年齢 72~73 歳の方が参加している。前期高齢者が半分、後期高齢者が 1/3、若い方も若干参加している。要介護認定を受けている方も 0.5%ほど参加している。

(スライド 10) 1 年後の参加者の体力をみると、男性では、5m 歩く歩行速度が 0.2 秒早くなっている。椅子から立ち上がる時間や TUG も早くなり、握力も上がっている。女性では、握力以外が向上しており、性差はあまりない。

スライド 11) 自分でやれる範囲でおもりを増やしていくのだが、おもりの本数もだんだん増えており、筋力の向上を表している。

スライド 12) 健康状態の自覚についても、始まった時よりも半年後の方が健康だと思う人の割合が増えている。元気になると老人クラブ、自治会、ボランティアなどいろいろな活動に参加する人が増える傾向がみられる。

これが能勢町で一番力を入れている介護予防の取り組みである。

スライド 13) 以前は、病気が治って自宅に帰っても世話をする人がいないからということでの社会的入院がたくさんあった。そこで、介護に特化した保険が必要となり、2000 年か

ら介護保険制度が始まった。市町村が保険者になり、介護が必要な人が被保険者になる。65歳以上が第1号被保険者、40～64歳までで、たとえば脳卒中など、特別の病気がある人が第2号被保険者になる。本人が申請すれば、その人の状態に合わせて要介護認定がされる。ケアマネージャーがその人の状況に応じ、保険で使える時間やサービスの範囲でケアプランを立てる。

(スライド14) 全国や大阪では要介護認定率が上がっているにもかかわらず、能勢町では、いきいき百歳体操が始まってから、要介護認定率が減少している。大阪のほとんどの自治体では40歳以上が払う介護保険料が3年ごとに上がっているが、能勢町では、この6年間据え置かれている。能勢町には健康長寿な方が多いのではないかと思う。

(スライド15) 今年度からは健康長寿事業を始めた。能勢町の了解を得、町民に説明し、家庭で血圧を測ってもらい、認知症やフレイルの予防ができるかどうかを検証する取り組みである。既に800名ほどに協力いただいている。1,000人を目指しており、あと200名なので、ご本人やまだ未参加の周りの方にご参加いただきたい。能勢町の40歳以上の住民、就業者が対象で、血圧計は無料で差し上げ、いろいろな検査の機会もある。

自分で血圧を測るだけで認知症の予防になると思っているが、まだエビデンスがないので、能勢からエビデンスを出したい。また、医療保険や介護保険の減少、健康長寿の延伸について能勢町と協力して分析していきたい。今年から血圧を測る地区、来年から測る地区に分けて進めていく。

(まとめ) 運動・栄養・社会参加が健康長寿には大事である。能勢の人は、運動についてはいきいき百歳体操や畑仕事をされている。栄養についてはおいしい水があり、栗があり、様々な農作物があり、豊かな食事をとっておられる。さらに百歳体操に参加するなどソーシャルキャピタルが高い。運動・栄養・社会参加が揃っているのが能勢町だと思っている。医療については、大きな病院がなく、多少希薄なところがあるが、皆さん、顔が見える関係を持っている。能勢町に暮らすことが健康長寿につながる、そういったまちではないかと思っている。こういったことも今回の計画に含め、これからも保って行ってほしい。

会長) 数字で出てくると説得力があり、ありがたい。聞きたいことはあるか。

-質問無し-

では、4～6月に能勢の状況を調査しに行く話になっているので、それに関する活動提案をお願いします。

委員) 私どもの栗園をコースに入れてもらえば、10年経って栗がどうなるかを実際にわかっただけだと思う。

既存の住宅地を回っていただきたい。空き地が多く、草が生える。草が生えて年月が経つと木が成長し、10年近くでかなり大きくなり、切るのも大変になる。周辺住民にも迷惑である。そういった状況を見学していただけたらと思う。

会長) 役場にヒアリングに行くという案もあったと思う。

委員) 委員の意見とも関連するが、地元の人意見と外から入ってきた人、Uターン、Iターンした人の意見は違うかもしれない。属性別に、先ほどのどういう言葉がよいのか、困っていること、関心事等を把握できたらおもしろい。場合によっては、外に出ていった人、能勢以外で移住を考えている人なども含め、タイプを一回整理したうえで、その人たちにどのようにメッセージを出したらよいのかを、整理できたらと思った。

- 会長) タイプを整理すること自体も目的にしながら、ヒアリングを行うという感じである。
- 委員) 定住環境の面では、外から来る人の受け入れ体制が必要な要素のひとつだと思う。明日、能勢町の新規就農者で作る 4H クラブの総会がある。能勢町に新しく住んだ子育て世代が多いので、そういう人の意見を聞いて、課題が何なのかをみてもよい。能勢高の生徒がそういう研究をしている。クラブを作って発表し、先日賞をもらった。それを発表してもらい、皆さんに高校生のイメージも聞いてもらえたらと思う。役場の横の生涯学習センターで、生物多様性日本一の関係で能勢のすばらしさを表すポスター展示が行われている。外から来た人がまとめているのだが、外から来た人が見た能勢の自然環境の良さと、中にいる人の理解とは多少違う場合があると思う。
- 委員) 前々回に能勢は物流拠点として、魅力があるという話をした。町内に 1 万坪の土地があり、先月、誘致を検討する企業 1 件、大手商社 1 件に見に来てもらった。その時に、ここに工場を作っても労働者が集まらないという話が出された。猪名川町では物流倉庫を建てて 1,500 人を雇用することとしたが人が集まらない。川西の一の鳥居のところに物流倉庫を作り 3,000 人雇用する話もある。箕面森町あたりも人がまったく集まらない状況だという。企業を誘致した場合は、おそらく外国人を雇用することになるが、能勢町の方々はそれを受け入れてくれるのか。猪名川町はまさしく海外の人を受け入れなければならない状況になっている。外国人を雇用している工場の見学にも行ってみたらどうか。将来、人が足りなくなることは間違いないので、自治体の課題として問題提起しておく必要がある。外の人たちに来てもらうまちというのに違和感がある。委員が言われるように既存住宅地に人を入れるのであれば、勝手に来てもらえばよい。物件ができて、住みたいと思えば勝手に来ると思う。また、乱開発されて自然がなくなることはないと思う。雇用の確保はできるが、人が集まらない地区になりつつあることから、周辺自治体との連携と空き家をどうするかについて考えながら、将来の絵を描いていく必要がある。
- 会長) 雇用の機会ができてでも地元には人数が少ないということである。川西市もそうか。
- 委員) 川西市はわからないが、能勢の物件を案内した人に、能勢も箕面森町も人が集まらないと言われた。山下からのバスの送迎があっても人が集まらない。雇用については海外の人を入れないと成り立たない状況だと思う。工場を見に行き、雇用状況を把握し、就業者が近所に住むまちを作ることを考えないといけない。
- 会長) 10 年前には考えなかった新しい議題である。工場ができて、就職して、新しい人が来るということ、今まで以上に考えないと、そもそも企業誘致ができないということである。
- 委員) これまで、雇用のことは考えていなかったのだが、ここは人が集まらないまちという感覚になっていて、大手は土地を探しに来ないことがわかった。既存の企業にとっては便利なまちのイメージだったのだが、新しく誘致するにはハードルが高いということ、ここ 1 か月で痛感した。
- 委員) 物流の雇用がどういう形態なのかを教えてください。非正規しかなければ、結果的には定住しない。
- 委員) お勧めしたひとつは、半導体のメーカーだが、そこは正規雇用。物流倉庫の方の雇用条件はわからない。山下界隈の中小企業で頑張っているところがあり、そこは正規の従業員だが、賃貸住宅に住むと辞める人が多く、従業員には家をどこかで買ってほしいと言っていた。能勢で家を

買うときに町で特典をつけられないか。猪名川町では、町内の物流倉庫に勤めて町内に住む人に若干の特典が付く。猪名川町に勤めて能勢に住む人に特典を付けてもよいと思う。一つの自治体だけでなく、川西市、能勢町、豊能町等と一緒にやってもらってもいいかもしれない。

委員) 先日、震災 10 年の特集で、ハイテク企業を福島に呼んだが、地元の人が就職できないという番組を見た。誘致する企業によっては、地元雇用が生まれるかどうかかわからないと思った。

委員) 箕面森町を開発したときには、箕面市に、市内で何人雇用するという話があったと思う。大手でなく中小だからということもあるかもしれないが、箕面市内でそれだけの人数は集まらなかったのではないか。猪名川町は 500 人とされているらしいが、とんでもない数字であり、現実には外国人を呼んでこないと難しい。大阪湾岸の物流倉庫では、ほとんどが海外の人の就労である。同じような状況になったときに能勢町は受け入れるのか。

委員) 行政のほうで、外国の実習生を受け入れているところが 2 ヶ所ほどある。

会長) 実習生にはよい人がたくさんいる。私はインドネシアと交流があり、知人がたくさんいるが、よい取り組みがたくさんできている。ただ準備しておかなければいけない。作ったら来るという簡単なことではなく、雇用のことまで考えておかなければいけないということである。

委員) 土地が安価なので来やすい反面、雇用のところで断念されている現状がある。能勢で工場をされている方が、募集しても人が来ないと言われている。猪名川町も同様である。

会長) 新しい問題であり、大事なことである。住宅を建てられるようにすることの意味がここにもある。せっかく宅地があるのだからという話である。

委員) 人材育成・サイクルのところの教育について、地方創生で他県から人を集めるのが目的であれば、幼稚園、小学校、中学校、高校にどんな特徴があり、外部の人にどんなメリットがあるのか、見せ方の工夫や、各学校がどんな取り組みをしているのかなどが気になる。

会長) 外から来た人にも話を聞き、学校や教育現場にも話を聞く。学校が良いことはとても大事である。能勢町では小学校の合併もあり、長く議論をされて今に至っている。ご意見がたくさんあると思う。

委員) 能勢町では小中高連携ということをよく耳にするが、基本構想には高校が入っていない。小学校、中学校は能勢町立だが、高校は府立だから入っていないとも聞いた。高校が地域活性化につながるという他のまちの事例もあるので、構想の中に幼稚園から高校まで含めるべきではないか。学校に話を聞きに行くのはよいと思う。

会長) 実際に連携は大丈夫なのかということで、現場の人に話を伺う。特に府立の高校の状況を聞くべきかもしれない。

委員) 空き家の問題に興味がある。高齢で施設に入所し家を離れた、いったん転入したが、仕事や教育の関係で出て行った、2018 年の災害で移転したなど、空き家が増えている。比較的新しい空き家と代々続いた家の空き家とがある。古民家再生など再利用もちらほらとは聞くが、成功している例もあれば、やりっぱなしのものもあると思う。空き家の実態は見学してみたい。

会長) 利活用も増えてきて、有名な事例も出てきた感じもある。

- 委員) よいほうに進んでほしい。
- 委員) 教育の話に関して、中学校や高校の調査は必要だと思う。
特に、能勢高校の生徒は頑張っているのので、話を聞かせてほしい。
能勢の中学生のほとんどが、高校受験でまちの高校に行くが、どうしてまちの高校に魅力があるのか、能勢にどういう高校ができればよいかなどといった話も聞けたらよい。
真っ白な頭の小学生にも能勢の良いところ、悪いところ、なぜ能勢が好きか、家でどんな話をしているのかを聞く。親に大きくなったら能勢を出るよう言われている子も、能勢に住んでもらわないと困ると言われている子もいると思う。そういう話を子どもから聞くのもおもしろい。
- 会長) ざっくりした話はアンケートでわかったが、本音を聞くということである。
話を聞きに行くという提案が多く、事務局に調整をお願いすることになるかもしれない。私は、情報整理係をさせていただきたい。能勢町の持っている調査結果や取り組みなどを一覽しにくいという話があるので、見やすいホームページを勝手に作ろうかと思っている。
- 委員) 総計でやるべきことかどうかわからないが、育てた栗の行方、栗の取り扱いについて探りたい。能勢は栗の採れるまちとして続いていってほしいと思う。たとえば能勢の中で6次産業までいく仕組みを作れば栗の行方ははっきりする。
- 委員) 栗の実態と生産のその次ということである。
- 委員) 特定の農産物で成り立っているまちの事例はあると思う。成功例があれば参考になる。
- 委員) 現場で取り組んでいる国保診療所の所長と訪問看護ステーションの看護師にも話を聞いてみてはどうか。
- 委員) 統計によると、エネルギーの支払いで能勢町から外に出ていく金額が8億円、豊能町を含めると12億円、あわせて20億円になる。関連する参考情報を資料として整理し提示したい。
教育に関連して、能勢の自然を活かして町外の子もたちとコラボできればよい。
- 会長) 能勢高校は豊中高校の分校だが、一緒ではない。全国で高校レベルでのいろいろな取り組みをやっている。府立高校のおもしろい取り組みにこちらから働き掛けないといけないのかもしれない。
- 委員) 商工会で若手をピックアップするので、町内の事業者の2代目、3代目の意見も聞きたい。
事務局) よろしくお願ひする。
- 会長) たくさんの意見が出た。日程調整もしにくいので、皆で出て行くのではなく、最低2人で行く、言い出しっぺでなくても日程の合う人が行く。組み合わせでやれることもあると思う。どこから始めても大丈夫なので、アポイントが取れた分からは、呼びかけてもらい、行ける人がいくことにしたい。
私は、ホームページアップデート作戦担当として、活動報告を仲間内で見られるようにしたい。最終まとめは事務局の力を借りることになる。また、どこかのタイミングで空いている宅地を見に行こうと思うので、よろしくお願ひする。バブル時代の変な事例でなく、よい事例を見たほうがよいように思う。
3か月ほどで実施し、審議会は間をあけて、動かしていく。また、動いていること自体を広報したい。

事務局) 委員から提案をいただいている。

テーマとして貨客混載の自動運転による AI オンデマンド交通ができないかというご提案である。たとえば農産物の生産者で出荷するのに車の運転が難しくなった人の声も聞きながら、自動で最適なルートを回るようなことができないかということである。

会 長) 委員の分野である。

皆さん、忙しくなるかもしれないが、よろしく願います。

今日の議事はここまでとし、事務局にお返す。

(4) その他

事務局) 次回について、間を空けるという話があったが、前回に日程を決めており、広報にも掲載している。次回は4月23日(金)13:30から浄瑠璃シアターで予定している。高校や商工会などの日程が合えば、この場にお越しいただき意見交換できればと思っている。

神吉会長) 23日の後は、少し間が空くかもしれない。まずは実態を把握し、可能性を探りに行きたい。そのあとは基本計画の話になり、政策、個別施策を具体的にあげていく作業になると思う。

・閉会

以上